

湯治の実態と湯治に対する意識について

○伊藤 雅子（東海大学大学院） 西野 仁（東海大学）

I. はじめに

わが国では1992年、経済大国から生活大国への政策転換が閣議決定された。経済成長を目指した忙しい競争社会から、ゆたかさとゆとりを実感できる社会の実現へ向けて、労働時間の短縮、その中でも特に長期休暇制度の確立が政策の目標として掲げられている。そして現在、「個人・企業・社会それぞれにメリットがある」といわれる12省庁の協力による「ゆとり休暇」¹⁾や、生き方(Life)を考える長期の(Long)休暇の頭文字からとった「L型休暇」²⁾などの休暇政策が推進されている。フランスのバカンスなどにひけをとらない休暇制度の確立を目指したものの、2003年の年次有給休暇の平均日数は一人当たり8.5日で分割取得が多く、与えられた日数に対する取得率は47.4%³⁾であった。その休暇も、どこかへ旅行に出かけようと思えば費用が高いという制約や、混雑、家族で休みがあわないなど、長い休みがとれないという理由以外の阻害要因も生じるため、のんびりくつろぐことは難しい傾向にある。しかし長期の休暇が難しいと言われている日本でも、江戸時代に広まり現在でも各地の温泉地に残る「湯治」のように、毎年農閑期に10日から1ヶ月家を離れて自炊形式の湯治場に宿泊するという習慣があった⁴⁾。湯治は温泉の科学的作用で病氣・怪我・疲労を回復させるだけでなく、住まいを離れて環境を変える「転地」による心理的な効果もあると言われている⁵⁾。日本は「休みを楽しめない」社会であり民族であると海外から評価されることがあるが、封建制度の時代から長期間普段の生活リズムを離れるという意識や習慣があったと考えられる。

機械化、情報・IT化、都市化など社会が変化していく中で、日本人にも長期休暇が必要だという認識に立って、古くから各地で行われている湯治に注目し、湯治の実態と湯治に対する意識について明らかにし、長期休暇が生活に根付くために必要な条件を探っていききたい。

II. 目的

本研究は湯治客を対象として、湯治の実態と湯治に対する意識について明らかにしていくことを目的とする。

III. 方法

現地調査

調査対象：岩手県H市N温泉に来ている湯治客

調査期間：2005年7月29～30日、9月13～21日

調査方法：実際に湯治を行っている人が、何をしてどんな雰囲気でも過ごしているのか、H旅館自炊部に滞在してインタビュー調査と観察調査を行った。

1. インタビュー調査

あらかじめ明らかにしたい質問項目を用意し、半構成的面接法によるインタビュー調査を行った。主な質問は「どのように湯治を行っているか（阻害要因を含む）」「湯治についてどのように考えているのか」などについてであった。

2. 観察調査

宿泊施設、温泉で人の行動、周囲の状況、環境などについて、湯治に関する資料・情報を参考に参与観察を行った。その中で、インタビュー調査の協力者以外からも、湯治に関する話を聞いた。

IV. 結果及び考察

調査協力者：協力者は滞在期間中に宿泊していた湯治客6名である。

(1) Aさん

60歳代、男性。現在は退職し、5年前から1人で自炊部に住んでいる。退職前の職歴はカメラマン、工事現場の作業員、仕出し。東京都出身、家族はいない。

(2) Bさん

60歳代、男性。現在は港で漁船の手伝いをしている。貿易の仕事や漁師など、外国・船での暮らしが長かった。岩手県出身、現在も県内のM市在住。妻と2人暮らし。

(3) Cさん

50歳代、男性。石油関係の会社のサラリーマン。岩手県出身、転勤で鹿児島、中東諸国にいたこともあったが、現在は県内在住。妻と娘3人の5人家族。

(4) Dさん

60歳代、男性。現在は退職。退職前は建築、修理などの仕事をしていて、趣味で始めたカラオケの音響も、時々イベントなどの注文が入るようになった。岩手県出身で、海岸沿いのO町に住んでいる。妻、三女、孫（長女の娘）と4人暮らし。

(5) Eさん

80歳代、女性。岩手県内のK市在住。家は農家で米を育てていて、娘・孫夫婦と暮らしている。現在仕事はしていない。

(6) Fさん

70歳代。女性。岩手県内のK市在住、I市出身。嫁いだ先がたばこ・蚕を育てている農家だった。今は孫・孫嫁と3人暮らし。現在仕事はしていない。

1. 湯治の実態について

1) 湯治に来る理由、動機について

Aさん、Bさんは、初めて来たきっかけは「治療のため」と答えている。しかし湯治は温泉の科学的作用で病氣・怪我・疲労を回復させるだけでなく、住まいを離れて環境を変える「転地」による心理的なリラクゼーション効果もあると言われている⁵⁾。Cさん、Dさん、Eさん、Fさんは最初から「家族旅行のようなもの」「温泉が好き」「嫁ぎ先が毎年来ることを習慣にしていた」と答えていて、Aさん、Bさんも継続して来ている理由は治療のためだけではないと考えている。このため、治療だけではなく場所や気分を変えることも湯治の目的であると考えられる。

2) 湯治の時期・期間について

農業・漁業に携わっていたBさん、Eさん、Fさんは、「毎年収穫後に来ている」と答えている。また、9月20日には毎年素人演芸大会が開催されているため、Dさんやその他の湯治客は「毎回大会にあわせて来ている」と話していた。期間については、現在も本人または家族が会社に勤めているという人は滞在期間が短かった。Cさんのように「休日と有給休暇を組み合わせて10日」が最も長く、宿泊客の大半は2泊程度だった。旅館

の従業員も「最近では長期滞在、自炊のお客さんは減っている」と話している。その一方「5年間住んでいる」Aさんや、「冬に1ヶ月滞在する」というEさん、「若いころは冬だけだったけど、今は何度も来られる」というFさんのように、現在でも長期間滞在している湯治客も見られた。自分の可能な範囲でできるだけ長く滞在したいという気持ちがあるようである。

3) 湯治場を選んだ理由について

「60年間来続けている」というEさんを筆頭に、同じ場所に毎年来ているという湯治客が多かった。理由としてはBさんの「温泉が自分にあっている」、Dさんの「演芸大会がある」、Fさんほか多数の「友達がいるから」があった。また6人中4人は「毎回同じ部屋に泊まる」と話しており、Fさんの「実家に帰って来るようなもの」という発言などから、慣れ親しんだ場所でのんびり過ごしたいと考えているようだった。

4) 湯治中の過ごし方について

Bさんの「昼寝が出来る生活って幸せ」や、Fさんの「8時くらいにゆっくり起きて、ごはん作って食べて、好きなように過ごして、気ままに温泉に入る」など、リラックスするという答えが多かった。湯治客の行動を観察すると、温泉以外では部屋でのおしゃべり、散歩、読書、絵を描く、テレビの視聴、採ってきた山菜の料理、川での魚釣りといった活動が見られた。6人とも「湯治に来ているほかの人とおしゃべりが楽しい」と答えていて、温泉を通した人とのふれあいを楽しんでいる様子が伺えた。

5) 費用について

1泊あたりの料金は、自炊では1人1700円、2食つきでは3900円である。この金額については「このくらいなら大丈夫」という答えが多かった。インタビュー協力者以外でも県内からの客が多いため、交通費もあまりかからない。湯治先では観光などに時間を使うことはなく、お金のかからない日常生活の延長のような生活をしているという様子が伺えた。

6) 湯治中の同伴者と家族の理解について

「毎回奥さんと来ている」と話していたDさん以外は、5人とも1人で来ていた。インタビュー協力者の6人以外でも、男女問わず1人で来ているという人が多かった。1人で来る理由としては、Aさんの「(奥さんは)ここだとごはん作ったりしないといけないから来たがらない」、Cさんの「温泉に興味がない」といった理由だけではなく、Fさんの「前は夫と来ていた(亡くなった)」という理由もあった。また1人で来ている人の中にも、Cさんの「いってらっしゃいって言われるだけ」、Fさんの「ゆっくりいってらっしゃいって送ってもらえて、ほんとに幸せ」など、湯治客の家族の湯治に対する考え方は、人によってかなり違いが見られた。今後は湯治客だけでなく、その家族の意識・考え方についてもさらに考察を深めていきたい。

7) 阻害要因について

「湯治に来られなかった時があったか」という質問に対して、6人ともなかったと答えている。来られるから来ているのではなく、来ようとして来ていると考えているようである。「来られなくなるとしたらどういう理由が考えられるか」という問いに対しては、「自分がひどく体調を崩した時」「ぼけて身の回りのことができなくなったら」などという答えがあがっている。インタビュー協力者以外では、長期間来られない理由として「ペットがいる」と答えている人もいた。どの人も湯治場で過ごす時間を大切に考えており、

Cさんが「休みやお金もなんとかかなっているし、家族や親戚も元気だし。来られないとしたらそういう理由だろうけど、今は大丈夫」と話しているように、予定を調整し、自分が可能な範囲で来続けたいと考えているようである。

2. 湯治に対する意識について

1) 印象に残っていること

「湯治を通して若い人とも交流が広がった」と答えたFさんのように、6名とも印象的な出来事として人との出会いや交流をあげている。「温泉で話しているうちに部屋を歩き来するようになった」「ここに来るたびに年賀状の枚数が増えていく」「食材の交換、おすそわけは日常茶飯事」という話など、温泉を通じた関係が日々構築されているという印象を受けた。

2) 湯治に対する意識

湯治は現在も、東北の地域住民にとっては年中行事の1つとして生活カレンダーの中に組み込まれている⁹⁾といわれている。実際に話を聞いた中でも、Dさんの「ここに来ることが中心となって1年が回っている」、Eさんの「はげみやごほうびにしてがんばれた」など、湯治を楽しみに日々過ごしていると考えられる発言がみられた。また、Aさんの「ストレスがなくて天国」、Fさんの「人生を楽しめるようになった」という発言などから、湯治場で過ごす時間は休みを過ごす時間というだけでなく、生きがいでありその人の人生に影響を与えるような時間であるということが伺える。

V. 今後の研究の進め方

現地調査によるデータの収集とともに、より細かい分析を進めたい。データの収集については、湯治客が多くなる農閑期である秋以降に再び調査を行う予定である。

VI. 引用・参考文献

- 1) 労働省労働基準局編, 1998, 『ゆとり休暇推進の手引き働く人と企業の活性化』, 全国労働基準関係団体連合会
- 2) 労働省労働基準局賃金時間部編, 2000, 『「長期休暇 (L休暇)」の普及に向けて』, 大蔵省印刷局
- 3) 『厚生労働省ホームページ「平成16年就労条件総合調査結果 1. 労働時間制度」』
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/jikan/syurou/04/4-1.html>
- 4) 野田進・和田肇著, 1991, 『休み方の知恵 休暇が変わる』, 有斐閣
- 5) 大塚吉則著, 1999, 『温泉療法 癒しへのアプローチ』, 南山堂
- 6) 三田村鳶魚, 1941, 『江戸の風俗』, 大東出版社
- 7) 天野藤男, 1916, 『農村と娯楽』, 洛陽堂
- 8) 山村順次, 1977, 『鳴子温泉郷における湯治客の地域的特性』, 千葉大学教育学部研究 26
- 9) 日下裕弘, 1995, 『日本の湯治 1 〈気〉思想の文化史』, 茨城大学教養部紀要 28
- 10) 日下裕弘, 1995, 『日本の湯治 2 〈気〉思想の世俗化と「ゆ」の西洋化』, 茨城大学教養部紀要 29
- 11) 山本英二, 2001, 『江戸時代の湯治及び湯治場に関する健康文化史的研究』, 第7回「健康文化」研究助成論文集
- 12) 森繁哉, 2001, 『湯治場の記憶—聞き書きの始まりに—』, 別冊東北学 2
- 13) 石川理夫・森繁哉・八岩まどか, 2004, 『地域資源としての温泉』, 別冊東北学 8
- 14) ロジャー・マンネル/ダグラス・クリーバー(速水敏彦監訳), 2004, 『レジャーの社会心理学』, 世界思想社